

『羅葡日対訳辞書』におけるCaritasの項目をめづつて

—charidade, amor, 「たいせつ」「じんせつ」のありよう—

漆 崎 正 人

一 はじめに

フーベルト・チースリク氏が、キリシタン資料において区別されて^{はず}いると指摘した三種の愛とそれらの訳語は、

感情的肉体的な愛情……愛、恋

精神的な相互愛……大切、に対して

超自然的（神的）愛……カリダアデ

であるが、それらのうち、「^{たいせつ}に対して」が、「精神的な相互愛」には関与しないことは以前に明らかにした。

ところで、「超自然的（神的）愛」の訳語については、小島幸枝氏は、「^{たいせつ}大切」「カリダアデ」などとし、charidade (caridadeとも、以下原則としてcharidadeで代表させる)の外来語訳「^{たいせつ}だあで」以外の漢語訳の存在に言及している。そもそも、charida-やその外来語形「^{たいせつ}かりだあで」は、キリシタン資料の宗教書においては少なからず存するが、辞書類においては稀れであり、

そういう点で、『羅葡日対訳辞書』（1959年刊）に一例ながらも、charidadeが使用されていることが注目される。そこで、本稿では、『羅葡日対訳辞書』において、charidadeが存する、Caritas (Charitas)の項目の記載内容について検討することにする。

二 charidadeや「^{たいせつ}かりだあで」に関しての先学の見解

まず、チースリク氏は、「^{たいせつ}かりだあで」について、

このポルトガル語のままの語は、すなわち三位一体なる神の内的な愛、または我々人間に恩寵として与えられた超自然的な愛をあらわしている。この神学的概念のために適当な言葉が無かったので、つまり原語をとりいれた。

と述べている。^{はず}さらに、現存最古のキリシタン版である『どちりいなきりしたん』（1591年刊）で、「^{たいせつ}対神徳」（神学的徳）に触れた条を引き、

テヨロガルのビルツウデス（対神徳）三あり。一には、ヒイデス（信徳）、二にはエスペランサ（望徳）、三にはカリダアデ、是也（括弧の中の漢語は、いずれもチースリク氏が付した訳）

とあることから、

神の特別な恵みによって与えられる超自然的な愛は、「カリダアデ」となっている。

と主張している。要するに、「超自然的（神的）愛」という根元的な神学的概念ゆえに、相応しい既存の日本語表現がなく、ポルトガル語形「かりだあで」で取り入れたと断じているわけである。実は、「対神徳」を構成する、「ひいです」（信徳）、「ゑすぺらんさ」（望徳）、「かりだあで」（愛徳）の三徳が、「後生を扶かる道の真のおきて」として、『どちらいなきりしたん』の「どちらいなの序」において、次のように述べられているのである。

御主ぜずきりしと御在世の間御弟子達に教へをき玉ふ事の内にとり分教へ玉ふ事は汝等に教へけるごとく一切人間に後生を扶かる道の真のおきてをひろめよとの御事も是即がく者達の宜ふごとく三の事にきはまる也一には信じ奉るへき事〇二にはたのもしくぞんじ奉るへき事〇三には身持を以てつとむへき事は也信じ奉るへき事とはしひいですの善にあたる事也是人間の分別に及はぬ事也是等の事をわきまへずんば後生の道にまよふ事おほかるへし〇たのもしくおもふ事とはしゑ

すへらんさの善にあたる事也是即きりしたんにでうすより与へ玉ふへしとの御やくそくの事也是等の儀を知らずばなんぎにあふへき時頼む所なしとおもひて心をうしなふ事もあるへし是又あにまの大なるさはり也〇身持を以てつとむへき事とはしかりたあての善にあたる事也是等の事をこゝろえさればでうすの御おきてをそむく事度度あるへしそれによて此の善にあたる事きりしたんの為に専なる事也故にがくしやと名を得られたる善人達は是等の儀につゐてあまたの経をかきき玉ふ者也

また、チースリク氏は、『スピリツアル修行』（1907年刊）中の「御パツシヨンの観念」の「第八の風体」において、ロアテルの原著のラテン文で、「神々人間の相互愛はラテン語でかなり感情の含まれているamorで表現されているが、いずれも日本語では『御大切』で表現されている」のに、「ラテン語の caritas に対して日本文ではポルトガル語で『カリダアデ』と言っている。」と述べ、訳語上、「精神的な愛」と「超自然的（神的）愛」とが明確に区別されていることを強調している。

たしかに、例えば、『どちらいなきりしたん』には、charidade は、「かりだあで」、「かりたあて」という表記の揺れはあるものは、いずれもポルトガル語形をそのまま取り込んだものと見做すことができるが、このような教理用語を、

あえて本語のままに残したこれらの処置は、おそらく初期に

おける布教のにがい経験をふまえて本語のかたちのなじみがたさも厭わず、『概念』を重んじたためとみなされる。おしなべて当時のイエズス会は、ことばの概念把握にきわめて慎重な構えをみせており、翻訳することによって誤解をまねくよりは、むしろ本語のままに残すのを賢明な措置と判断したのである。

と考えられる。実際、イエズス会宣教師自身の見解としても、ロドリゲス『日本大文典』(1604—08年刊)において、次に引くように、『Do modo de introduzir alguns vocabulos nossos na lingua Iapoa de que carecem & de como se deuem pronunciar.』

(欠けている日本語の語のために我々の語を導入する方法及びその語の発音すべき方法について)の条の、*Nome das virtudes acabados em, An, dade, &c.* (An, dade などで終わる徳を表わす名詞)の項目に、『Caridadeが、『対神徳』を構成する他の二徳、Fides(信徳)・Esperança(望徳)とともに挙がっているのである。

『*Porque na lingua de Iapam faltam algũas palavras para explicar muitas cousas novas que o sagrado Euangelho traz consigo, he necessario ou entender de nouo, o que em Iapam he diffiçil, ou tanto alas da nossa lingua corrompende as conforme melhor cuyr na pronunçia am de Iapam, ficando com o naturais. E proque a lingua Portuguesa, combina*

muito com a Iapoa, em muitas syllabas & na pronunçiaqam, contũmente della se pode tomar os taes nomes, post que toma hem alguns se tomaram da latina. Estes nomes ou sam que pertenaem a Deus, aos sanctos, ou as virtudes & a algũas outras cousas de que carecem. (訳：日本語には、神聖な福音と共に齋される多くの独特の事柄を言い表わすためのことばの幾つかが欠けているゆえに、日本語では困難ながら、新たに作り出すか、我々のことばから採って、その固有語と等しくするために、日本語の発音をより一致するように変形することが必要である。そして、ポルトガル語は、多くの音節や発音において、日本語と多く調和するゆえに、そのような名詞は、いくらかはラテン語から採られることがあっても、通常はポルトガル語から採ることができる。このような名詞は、デウスや聖人か、徳、そして必要な他の事柄に属するものである。)

(179才)

『Tentaçam, Confissam, Contricam, Satisfacam, Justificacam, Purificam, Inspiracam, Deuacam, Peccacam, Obrigacam.

『Caridade, Castidade, Humildade, Humanidade, Diuidade, Virgindade.

『Prudencia, Consciencia, Sapiencia, Potencia, Justica, Indulgencia, Eucharistia, Misericordia, Proseca.

¶ Temperança, Esperança, Perseverança, Benaventurança, Graça.
Porque Gracia corre por nome de mulheres.

¶ Sacramento, Mandamento, Testamento, Bautismo, Penitencia, &c.

¶ Imgen, Contas, Contabenta, Iejum, Disciplina, Virgen, Orden, Cruz, Oratio, J. Oraçan, Virtus, J. Virtude, Beato, Justo, Santo, Agnus Dei, Fides, Missa, Matrimonio, Martyr, Passion, Natal, Nascimento, Pascoa, Quaresma, Ecclesia, Somanasanta.

Mortal.

Venial. } Toga.

Original.

(訳) ¶ テンタサン (誘惑)、コンヒサン (告白)、コンチリサン (後悔)、サチシハサン (償い)、ジュスチヒカサン (義認)、プリヒカサン (清め)、インスピラサン (靈感)、デワサン (信心)、ペルヘイサン (完成)、オビリガサン (義務)。

¶ カリダアデ (愛徳)、カスチダアデ (貞潔)、ウミルダアデ (謙遜)、ウマニダアデ (人間性)、デビンダアデ (神性)、ビルゼンダアデ (童貞)。

¶ プルデンシヤ (賢慮)、コンシエンシヤ (良心)、サピエンシヤ (上智)、ポテンシヤ (能力)、ジュスチサ (正義)、インヅルゼンシヤ (免罪)、エウカリスチア (聖体の秘跡)、

ミゼリコルチヤ (慈悲)、ポロヘシヤ (預言)。

¶ テンペランサ (節制)、エスペランサ (望徳)、ペルセペランサ (忍耐)、ガラサ (恩寵)。それゆえ、ガラシヤは女性の名前として通用する。

¶ サカラメント (秘蹟)、マンダメント (掟)、テストメント (契約)、バウチズモ (洗礼)、ベニテンシヤ (悔悛)、など。
¶ イマゼン (聖画)、コンタス (念珠)、コンタペンタ (聖なる念珠)、ゼジュン (大齋)、デシビリナ (むち)、ビルゼン (処女)、オルデン (品級)、クルス (十字架)、オラシヨ (祈り)、またはオラサン (祈り)、ビルツス (善徳)、またはビルツウデ (善徳)、ベアト (福者)、ジュスト (義人)、サント (聖人)、アネイストテウ (神の子羊)、ヒイデス (信徳)、ミイサ (ミサ聖祭)、マチリモウニヨ (婚姻)、マルチル (殉教者)、パシヨン (キリストの受難)、ナタル (キリストの降誕節)、ナシメント (誕生)、パスクハ (キリストの復活祭)、クハレスマ (四旬節)、エケレジャ (教会)、ソマナサンタ (聖週間)。

モルタル科 (大罪)。ベニアル科 (小罪)。オリジナル科 (原罪)。(179)

キリスト教の伝来とともに新たに齎された新しい概念・事物、特にキリスト教関係用語は、日本語に翻訳困難であるとして、ポルトガル語やラテン語から採らざるを得なかった事情と対象語彙が

記載されているのである。

一方、小島幸枝氏は、「超自然的（神的）愛」の訳語として、「かりだあで」以外にも「ごたいせつ」などの漢語訳の存在を認めているわけであるが、その見解は、『スピリツアル修行』の「ロザイロの観念」における、ポルトガル語と訳語との関係をロアルテの原著と対校した調査結果から、ポルトガル語の、

Charidade は「大切／＼大切／＼カリダアデ」と訳されており、

また、カリダアデはデウスに限らず、アポストロのカリダアデ（八一才）、御母のカリダアデ（七一ウ）の例も見られ、神の愛に匹敵する個の感情を超越した愛について用いられている。^{また}

ことに基づいている。

小島氏までの見解を勘案すると、charidade は日本における布教活動の早期には、ポルトガル語のまま訳語として採用されていたが、次第に訳語として「ごたいせつ」も用いられるようになっていったようだというおおまかな道筋が見えてくる。

なお、現在刊行されている、国語辞典、古語辞典の主要なものでは、「かりだあで」を見出し語に掲載しているのは、『時代別国語大辞典室町時代篇』第二巻（三省堂・一九八九年）、『日本国語大辞典（第二版）』第三巻（小学館・二〇〇一年）、『広辞苑（第六版）』（岩波書店・二〇〇八年）ぐらいである。前二書では、それぞれ、

かりだあで【^{ガルト}Charidade, Caridade】キリシタン用語。対神徳の一である、仁愛、愛徳。「身持ヲ以テ勤ムベキ事トハ、カリダアデノ善ニ当ル事ナリ」（ドチリナ）「カリダアデト云エルデウスノ御大切ニ引カレ致ス所作ノ事」（コンテムツス）

カリダーデ【^{ガルト}caridade】（カリダデ）キリシタン用語。キリスト教での徳のうち、対神徳の一つ。愛徳。慈悲。

*どちりなきりしたん（一六〇〇年版）（1600）序「さてつとめをこなふべき事とは、かりだでという大切の善にあたる事なり」*こんでむつすむん地（1610）一・一四「かりだあでといへるデウスの御大切にひかれていたすしよさの事」

とあり、キリシタン資料からの用例に基づいて、キリシタン用語として、対神徳の一つである△愛徳▽の意であるとしている。

『広辞苑（第六版）』では、

カリダーデ【^{ガルト}caridade】（キリシタン用語）愛。慈愛。

サカラメンタ提要付録「一」とて清き大切を持つやうに教へ勤むべし」

とし、キリシタン資料からの用例を挙げ、キリシタン用語としているが、「愛」、「慈愛」という語釈にとどまっている。いずれにせよ、これら三書とも、「ごたいせつ」との関係についての説明は施していない。

三 『羅葡日対訳辞書』の charidade の記載項目 Caritas

『羅葡日対訳辞書』において、charidade は、ラテン語 Caritas (Caritas) の項目で、その対訳ポルトガル語として掲出されている。

Charitas, I. Caritas, atis. Lus. Charidade, amor. Iap. Taiket, conxet.

(訳: Caritas¹ または Caritas² amor. ポルトガル語。Charidade, amor. 日本語。大切。懇切。)

caridade は、ラテン語項目 Caritas (Caritas¹、以下原則として Caritas で代表させる) の対訳ポルトガル語として、amor とともに挙がっている。さらに、対訳の日本語として、「たいせつ (大切)」と「こんせつ (懇切)」が付されている。

三・一 見出し語 Caritas とポルトガル語訳語の charidade, amor について

『羅和辞典 (改訂版)』(研究社・二〇〇九年)によれば、caritas³ には、「①高値、高価。②尊敬、好意、愛情。③『キリスト教』人間愛、隣人愛。」の三つの意義があるとされている。これら三つの意義のうち、キリスト教用語としての語義は、そもそもはギリシア語の agape (アガペー) のラテン語訳としての意義であり、

神の人間に対する恩恵的愛とそれに応える人間の神に対する

感動を意味するが、それは人間相互には兄弟的・姉妹的な愛として発現する。カリタスが人間の心に徳として注がれるとき、信仰や希望とともに神愛的徳とよばれる^注。

とされるものである。したがって、キリスト教用語としての caritas は、愛の発現のプロセスからして、信徳、望徳ともに「対神徳」を構成するところの△愛徳▽(△神愛的徳▽)を基本義とすることばということになる。

次に、ポルトガル語の charidade は、『現代ポルトガル語辞典』(白水社・一九九六年)によれば、「①思いやり、慈悲、情け。②施し(もの)、慈善。③《神学》愛徳 神と隣人に対する超自然的愛、特に隣人愛。」の三つの意義が存するとされている。charidade の意義において、caritas の語義と共通していると見做せるのは、神学用語、すなわちキリスト教用語としての△愛徳▽の意義であるから、『羅葡日対訳辞書』では、△愛徳▽の語義に対応するポルトガル語として、charidade が引き当てられているわけである。要するに、キリスト教用語としてのラテン語 caritas のポルトガル語での言い換えとして charidade が示されているのである。

次に、ポルトガル語の amor については、同じく『現代ポルトガル語辞典』には、「①愛、愛情。②『男女間の』愛、恋、恋愛。③情事、アバンチュール。④『事物に対する』愛好、情熱。⑤愛する人(物)⑥《ブラジル、口語》とてもきれいな人(物)、とてもよい人(物)⑦[A~]愛のキューピッド。⑧『動物の』交尾欲。」

の意義が挙がっている。語義は多義にわたっている。ポルトガル語の amor は、ラテン語の amor との関係が深く、ラテン語の amor の語義を、『羅和辞典（改訂版）』から引くと、「①愛。②恋愛関係。③愛の対象、愛人。④情、欲望、色情。⑤恋愛の神。⑥恋愛の神々。（複数形）。」であり、かなりの部分で両語の語義が重なる。実際、『羅葡日対訳辞書』の Amor の項目では、

Amor, oris. Lus. Amor. Iap. Taixet yomoi. (訳: Amor。ポルトガル語。Amor。日本語。大切。思ひ。)

とあるように、見出し語のラテン語 Amor に対するポルトガル語訳としては、Amor だけが引き当てられているという状況である。したがって、ラテン語 caritas のポルトガル語訳として、amor も挙げられていることに關しては、多義を有する amor において、精神性が合意されていると見られるところの、『現代ポルトガル語辞典』の amor の語義で言えば、①の「愛、愛情」が、ラテン語 caritas の、キリスト教用語としての△愛徳を基本義とする語義を包接する語義であるという関係性に基づいて、ここでの amor の採用となったと考えられる。

なお、△愛徳の意義の外来語としては、キリシタン資料において、ラテン語の caritas が殆ど用いられずに、caritas の言い換えながら、ポルトガル語 charidade の専用となっているのは、前述のロドリゲス『日本大文典』に、「ポルトガル語は、多くの音節や発音において、日本語と多く調和するゆえに、そのような名詞は、

いくらかはラテン語から採られることがあっても、通常はポルトガル語から採ることができる。」とあるように、ラテン語よりもポルトガル語の方が一般に馴染みやすいと宣教師たちが判断したからであろう。

三・二 見出し語 Caritas と日本語訳語の「たいせつ」「こんせつ」について

△愛徳の意の charidade が、キリシタン資料において、外来語としてそのまま用いられるようになったのは、△愛徳の概念に相応しい日本語が存していないと当時来日した宣教師たちに判断されたことによるわけであるが、では、『羅葡日対訳辞書』において、ラテン語項目 Caritas の日本語の対訳として、「たいせつ」「こんせつ」が引き当てられているのはどうしてであろうか。

まず、「たいせつ」については、『スピリツアル修行』の「ロザイロの観念」において、原著における charidade が、「たいせつ」「こたいせつ」、「カリダアデ」で訳されているという小島氏の報告があり、さらに「ロザイロの観念」中の「(二) たいせつ」全五十例中、原著では amor が二十三例、charidade が二十三例と拮抗しているという、小島氏の調査を拠る所とすれば、Caritas の項目の「たいせつ」は、△愛徳の意として「たいせつ」が用いられたキリシタン資料としては早期の希有な例ということになるが、

『羅葡日対訳辞書』よりも後に出版された『日葡辞書』には、次に引く「たいせつ」の項目はもとより、どの項目の、ポルトガル語訳文・説明文においても、*caridade*（及び *charidade*）は全く用いられていない。

Taixet. Amor. 『Taixetini moyuru. Arder em amor.』 Taixetino iguusu. *Amor sumamente, ou mostrar grande amor. agaselhado.* 『Taixetini zonzuru. I.vonf. Amar.』 (訳: 大切。Amor. 『大切ニ燃ユル。amorに燃える。』 大切ヲ尽ス。非常に愛する、また非常なamorと厚遇を示す。『大切ニ存ズル、または、思フ。愛する。』)

『日葡辞書』において、見出し語の「たいせつ」に対しては、ポルトガル語訳としては *amor* だけが与えられているように、概ねキリシタン資料においては、「たいせつ」は、*amor* との結びつきが強い。『羅葡日対訳辞書』のラテン語 *Amor* の項目では、ポルトガル語対訳は *Amor* だけで、日本語対訳は、「たいせつ」が第一に挙げられている。前節では、ラテン語項目 *Caritas* に対して、ポルトガル語の対訳として *amor* も引き当てられていることについては、多義的な *amor* において精神性が含意されていると見られるところの一義が、キリスト教用語としての *caritas* の語義を乞接する上位概念であるという関係性に基づいて引き当てられていると推察したわけであるが、*amor* のその一義を、「たいせつ」が担っていることと見做せることからすれば、「たいせつ」もまた、ラテン語

の *caritas*、ポルトガル語の *charidade* のキリスト教用語としての語義を包接する上位概念の語として、挙げられていると解すべきであろう。

キリシタン資料に、時折見られる、「……かりだあでといふ……(つ)たいせつ……」という型の表現は、例えば、

① *Charidadeto igeru Deusno gotaxeini jicarete...*

『コンテムツス・ムンデ』(1596年刊) (三七ページ)

② かりだあでといふ大切其外にれりじよんという善もあり『ぎや・ど・べかどる』(1598年刊) (下巻七十丁裏)

③ かりだでといふ大切の善にあたる事なり『どちりな・きりしたん』(1600年刊) (一丁裏)

④ *Charidade tote qiyogi taixeluo moyu yoni voxije susunbexi.* 『サカラメンタ提要付録』(1605年刊) (四ページ)

⑤ *macotono Charidade naru Deusno gotaxeini* 『スピリツアル修行』(「パッシヨの観念」) (1607年刊) (二〇九丁裏)

のように存するが、③の表現は、『どちりいな・きりしたん』で、「かりたあでの善にあたる事也」とある箇所を、「大切」を説明に加えることで「かりだあで」の概念の理解の助けとしようとしたものと解されることや、⑤の *Charidade* と *gotaxeini* には、ラテン語原著では、それぞれ *caritas*、*amor* と使い分けられているという、前掲のチースリク氏の指摘も踏まえれば、これらの、「かりだあで」と「たいせつ」の共起関係は、やはり、「たいせつ」が概念

上、「かりだあで」の上位概念であるという認識により成り立っている」と解するのが妥当であろう。もっとも、このような表現の型は、言い換えとしての機能も担っている以上、このような型の存在が、*charidade*と「たいせつ」との関係が強めることにも働き、『スピリツアル修行』の「ロザイロの観念」では、原著の *charidade* の二十三例が「(一)たいせつ」で翻訳されるようになる、つまり、類義性も生じさせた一因とはなっている。

次に、「こんせつ」について検討しよう。「こんせつ」は、『日葡辞書』には、

Conxet. Nengoroni xet nari. Amor & gasalhaddi Conxetno
 igusu. *Mostrar grande amor & gasalhaddo.* (訳：懇切。
 ネンゴロサ 懇切ナリ。amor & 厚遇と 懇切ヲ尽ス。非常なamor &
 厚遇を示す。)

とあり、別稿で述べたように、『日葡辞書』における、「たいせつ」「こんせつ」の項目の例文、「たいせつをつくす」、「こんせつをつくす」に添えられたポルトガル語訳文中の、当該語のそれぞれの語釈が、*amor*と*gasalhaddo*へ厚遇、*amor*と*gasalhaddo*へ厚遇で、同一と見做せることから、「たいせつ」と「こんせつ」とは類義性が高いと認められる。よって、『羅葡日対訳辞書』において、「たいせつ」と「こんせつ」とが、日本語の対訳として併記されている項目が存すること自体は自然である。ただし、『羅葡日対訳辞書』には「こんせつ」が十四例用いられているが、

「たいせつ」と併記されているのは、*Caritas*の項目を含め二例のみであることが、むしろ意外である。

他方、『羅葡日対訳辞書』の *Amor*の項目では、前に引用したように、「たいせつ」は「おもひ(思)」と併記されている。「おもひ」は、『日葡辞書』の「本篇」には、

Vonoi. *Pensamento, ou cuidados de amor, ou tristeza, ou de outro qualquer effeito. Item, Desejo, ou vontade.* (以下略す) (訳：思ひ。考え、または、*amor*や悲しみやその他の何らかの影響による心配。また、願望、または意志。)

とあり、思考や感情を表わす語と捉えられていることからしても、感情的色合いも強いラテン語項目 *Amor*との意義的整合性から、「おもひ」が採られていることは疑いない。したがって、*Caritas*の項目で、「こんせつ」が「たいせつ」と併記されていることも、やはり *caritas*及び *charidade*との意義的整合性により、「こんせつ」が選ばれていると理解することができる。とすれば、「こんせつ」も、「たいせつ」のように、概念上、「かりだあで」の上位概念に相当する語義の語と認識されていたということになろう。

四 おわりに

以上、本稿では、『羅葡日対訳辞書』における *Caritas*の項目の

記載内容について、ポルトガル対訳の *charidade*、*amor*、日本語対訳の「たいせつ」「こんせつ」のありようを検討してきた。

もともとキリシタン資料において間々見られる *charidade* (*caridade*)、「かりだあで」は、既存の日本語に翻訳困難なキリスト教用語と判断されたために、ポルトガル語形を外来語として取り入れたものであったが、後には『スピリツアル修行』の「ロザイロの観念」におけるように、ポルトガル語原著に存する *charidade* が、「かりだあで」以外にも、「(こ)たいせつ」として翻訳される文献も現れてくる。

そういう状況下、*charidade*、「かりだあで」は、キリシタン資料の辞書類においては殆ど存しないものの、『羅葡日対訳辞書』には一例ながら存しており、その記載項目ラテン語の *Caritas* とポルトガル語対訳の *charidade*、*amor*、日本語対訳の「たいせつ」「こんせつ」のありようが注目される。

まずラテン語項目 *Caritas* と *charidade* との関係については、*charidade* はキリスト教用語としてのラテン語 *caritas* のポルトガル語による言い換えとして揭示されていることを確認した。また、ポルトガル語の *amor* が対訳に採用されていることに關しては、多義的な *amor* の一義が、キリスト教用語としての *caritas* の、 \wedge 愛徳 \vee を基本義とするところの語義を、包接する語義であるという関係性に基づいていることを論じた。

次に、*Caritas* の日本語対訳として、「たいせつ」が引き当てら

れていることについては、『日葡辞書』の「たいせつ」の項目では、*charidade* (*caritas*) が語釈に全く使用されていないなど、他の項目でも皆無であることや、キリシタン資料に存する「かりだあで」と「たいせつ」との共起関係の仕方には、「たいせつ」が概念上、「かりだあで」の上位概念であるという認識に基づいていると考えられることから、*amor* の場合と類似の関係性に基づいていると判断できる。さらに、「こんせつ」が日本語対訳として挙げられていることに關しては、「こんせつ」と「たいせつ」との強い類義性によって、併記されていると解されるので、「こんせつ」が概念上、「かりだあで」の上位概念であるという認識が存在していると考えられるから、「こんせつ」もまた *amor* の場合と類似の関係性に基づいていると判断できる。

キリスト教的愛を考察対象とする場合、従来「こんせつ」に關しては、殆ど関心が持たれていなかったように思われる。『羅葡日対訳辞書』の *Caritas* の項目での「こんせつ」のありようは、この語の、キリスト教的愛との関わりを検討する必要があることを示していると言えよう。

また、*Caritas* の項目の、日本語対訳の「たいせつ」「こんせつ」は、項目の同義的な言い換えではない場合のありようを示していると考えられ、『羅葡日対訳辞書』における対訳の日本語については慎重な取り扱いが必要である。

注1 「キリシタン宗敎文学の靈性」(『キリシタン文化研究会

會報』第18年第4号・一九七七年十二月)、後に『キリシタン敎理書』(一九九三年・敎文館)の「解説」に再録。

注2 拙稿「キリシタン資料におけるハ愛Vの表現の一問題―

『に對して』とハ精神的相互愛Vの關係をめぐって―

(『藤女子大学国文学雑誌』第83号・二〇一〇年十一月)。

注3 「たいせつ(大切)」(『講座日本語の語彙』第10卷・一九

八三年・明治書院)。

注4 注1同論文。

注5 注1同論文。

注6 注1同論文。

注7 亀井孝・H、チースリク・小島幸枝『日本イエズス会版

キリシタン要理』(一九八三年・岩波書店)、五三ページ。

注8 注3同論文。

注9 「カリタス」『岩波キリスト敎辞典』(二〇〇二年・岩波

書店)。

注10 『キリシタン版『スピリツアル修行』の研究』(一九八七

年・笠間書院)、一〇七ページ。

注11 拙稿「『日葡辞書』における「たいせつ(大切)」の類義

語について」(『藤女子大学国文学雑誌』第85号・二〇一

一年十一月)。

へうるしぎ まさと／本学教授

第八十五号 目次 二〇二一年 十一月

『日葡辞書』における「たいせつ(大切)」の類義語について

..... 漆崎 正人

水鼓子卷之上譯注(その一) 名畑 嘉則

日韓におけるオノマトベ運用の諸相 阿部 友加里